

●4. 知財と標準化の教育の課題 (済み)

平松 幸男(大阪工大)

【質問者】

インターンシップの利用状況はどうか。

【発表者】

正規科目(選択科目)として単位を与えている。

80時間で単位がとれるようになっているので、1日8時間参加すれば2週間で終了するが、学生の勉学の都合によりまびいて参加すれば3カ月かかる。

近畿経済産業局の枠組みのインターンシップへの参加について、他の参加大学では、参加が数人といったところ。

インターンシップでは、具体的な実務をやることができ理解も進む。

最近、学生が消極的で受け入れ企業があるにも関わらず、なかなか手が上がらない。せっかくのチャンスがあるのに、もったいないと思う。

【質問者】

インターンシップの受け入れ先はどうやって選ぶのか。

【発表者】

インターンシップに参加した学生には、必ずどのようなことが企業により求められたのかをレポートさせている。それらをもとに項目を作成し、受け入れ先に学生にやらせたいことの希望を聞いている。学生にも自分ができることをヒアリングして、マッチングをしている。学生には、受け入れ先が必ずしもマッチしないことがあることを予め伝えている。

【質問者】

インターンシップの受け入れ先は継続しているのか。

【発表者】

それは学生による。受け入れ側がそのとき受け入れた学生がよければ、”次も”となるが、あまりよくなければ次はこない。これは仕方のないこと。

【質問者】

インターンシップの一番の効果は何か。

【発表者】

インターン先の企業は中小企業もあるので、そこでその企業に関連する他企業の特許を検索して提示するだけでも喜ばれる。中小企業には、専門担当者がいないところが多いため、どのように調べればよいのかを知らないところが多い。一方、学生にとっては貴重な実務経験となる。

【質問者】

インターンシップの受け入れ先はどうやって見つけるのか。

【発表者】

近畿経済産業省の枠組みの他に、中小企業の経営者および知財担当者向けに近畿知財塾をやっている。そのなかで知財の重要性を理解してもらっている。

最後に、インターンシップをやっているが、興味がないかどうか打診する。こうしていくつかの企業が関心を持って受け入れてくれる。

【質問者】

関東では同様の取組はないのか。

【発表者】

関東経済産業局が知財塾について興味をもっており、来年度より実際に開始すると聞いている。

【質問者】

インターンシップの論文、例えばDVDなどをめぐる企業の知財戦略に関する論文は公開されているのか。

【発表者】

優秀論文は「知的財産専門研究」という論文集で公開されている。昨年度は太陽電池分野における日本企業の競争力喪失過程を分析した論文が選ばれた。1号おきに学生の優秀論文、教員の論文が出版される。学生の分はすでに過去5冊程度が発行されている。

【質問者】

英語による講義はなぜ広がらないのか。

【発表者】

ニーズはある。かつて大阪工大に知財専門職大学院を開校した時、韓国のサムソンから講義が英語で行われるなら10人程度送りこみたいという話があったと聞いている。しかし、英語で講義をやってもよいという講師をすべてそろえるのは大変なため、一部の講義にとどまっている。

いくつかの大学で連携して、相互単位交換することも考えている。

【質問者】

インターンシップを含めた知財教育は素晴らしいと思う。”グローバルな”知財教育についてはどうか。

【発表者】

英語による講義ができるようになれば、今後そのような教育を行えたらと考えている。特にアジアのなかで中国や韓国、シンガポールなどの大学と連携して、行うのも一つのアイデア。